

ペット市場が映す中国社会の変化



松倉 佑輔

中国で暮らしていると、街で犬を散歩中の人とよくすれ違ったり、服で着飾った高級な犬種も珍しくない。近年、中国では猫や犬などのペットを飼う人が急増、関連用品は成長市場として注目されている。変化の激しい中国だが、ペットブームは本物なのか。

その雰囲気を感じようと2月末、北京市内で開催された展示会「北京国際ペットフェア」を訪ねた。12万平方メートルの会場に1500以上の事業者が出展。ペットフードやおもちゃ、服などが所狭しと並び、会場は来場者であふれかえっていた。

その活況ぶりは中国のペット熱を反映している。2025年中国ペット業界白書によると、都市部でペットを飼う家庭は約7689万世帯に達し、犬猫の数は1億2000万匹を超えた。関連市場の規模は3000億元（約6兆円）以上で、27年には4000億元（約8兆円）を超えると予想されている。

展示会には世界各国の企業が集結。日本貿易振興機構（JETRO）のブースには18社が出展した。

日本企業の強みは何か。キーワードは「健康」だ。最近ペットを飼い始めた人が多い中国では犬や猫もまだ若く、動物の高齢化や病気に対応した製品は日本に一日の長がある。ペット用のサプリメントを販売する「モノリス」の茂呂陵宏社長は「中国からの観光客が日本でまとめて製品を買っていくこともある。需要はまだまだ増える」と手応えを感じている。上海に長く滞在した薬膳ペットフード販売「not」の水澤佳子社長は「ペットに愛情をささげる所得にゆとりのある若者が増えた」と指摘する。

背景には少子化もある。米金融大手ゴールドマン・サックスは、30年までに中国都市部のペット数は4歳未満の乳幼児数の2倍になると予測。1人暮らし、あるいは子供のいない若者たちにとって、ペットは日々の生活を癒やす家族の一員となっている。ペットを冗談めかして「毛孩子」（毛の生えた子供）と呼ぶ言葉もネット上をにぎわす。

「ペット関連の支出は惜しまない」という人も多いという。子供の教育費が高騰化している現状に重なる。

中国社会の変化と密接に関わっている昨今のペットブーム。一過性のものとは言えなそうだ。